



「平和特集・座談会」

これからは 市民力

市民の力は、タフでしなやか。
任せすぎず、背負いこみすぎず、しわを寄せあいながら、
周囲を変えていきまじょう。

◎出席者

本橋成一 (写真家・映画監督)

下村健一 (ジャーナリスト・市民メディア支援)

湯浅誠 (反貧困ネットワーク事務局長)

道田涼子 (NPOシードオピニス代表)

写真／本橋成一



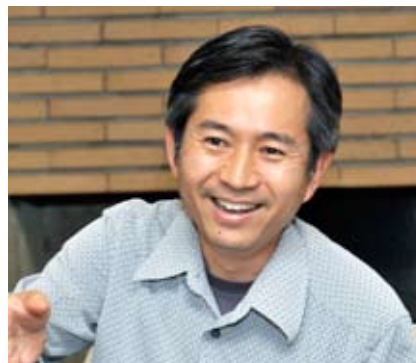
みちだりょうこさん 1975年生まれ

劇団四季に入団、ミュージカル「EVITA」で初舞台。現在は故郷広島に住み、09年にNPO「シードオブピース」を設立。昨年は、入市被爆者の話を朗読劇「みえこの夏」にまとめ上演。この8月も平和コンサートを企画。



もとはし せいいちさん 1939年生まれ

九州・北海道の炭鉱の人々を撮り、68年に『炭鉱（ヤマ）』で太陽賞受賞。以後、市井の人々の暮らしといのちを撮り続ける。91年よりチェルノブイリ被災地に通り、写真集『無限抱擁』、映画「ナージャの村」を初監督。映画「アレクセイと泉」「パオパブの記憶」ほか。



しもむら けんいちさん 1960年生まれ

TBS報道局を経て99年よりフリー。松本サリン事件で河野義行さんの免罪をスクープ。キャスター、東京大学社会情報研究所助教授、小中大学でメディアリテラシーの授業なども。09年NPO法人「市民がつくるTVF」理事に。



ゆあさ まことさん 1969年生まれ

NPO法人 自立サポートセンターもやい事務局長。ホームレス支援に携わり、日本の貧困問題を訴える。08年「年越し派遣村」村長。昨秋から内閣府本府参与、緊急雇用対策に関わる。著書『反貧困』『岩盤を穿つ』ほか。

これからは市民力

ワヒリ語で「ゆつくりゆつくり」という意味です。菓が、僕にとつての暮らしの原点になった。

湯浅——九五年から野宿の人、いわゆるホームレスの問題に関わってきました。友人が支援しているのを渋谷に見に行ったのが最初、一〇〇人がいて驚きでした。年々すごい勢いで増え、社会が壊れてきていると感じた。この問題を分かってもらおうと、渋谷の駅前野宿の人たちとカンパ活動をも、足を止めてくれる人はあまりいませんでした。二〇〇〇年代になると、若者や一般の人も含めて食えない人が増えてきて、これはもうホームレスだけの問題ではない、「貧困問題」だと言いついたのが二〇〇六年。

ようやく社会問題になったのです。

私自身は、自立をサポートする団体「もやい」で個別相談にのる一方、「反貧困ネットワーク」でシングルマザーや障害者、多重債務者たちと問題を社会的に訴える、去年からは内閣府参与として政治的対策に関わる、と三つの面から社会全体の底上げを図っています。

下村——僕は五歳でミニコミ紙を始めたんです。広告の裏紙に身近な出来事を新聞風に書いて、近所に一〇円で売る。今のメディアではめずらしい黒字経営でした（笑）。

本橋さんはお嬢さんですが、僕は毎日のように一緒に遊んでいた三軒隣の女の子が、筋ジストロフィーを発病して

スイッチ・オンの前に——いろんな人がいる社会

道田——私は昨年、コーラスの仲間と「シードオブピース」というNPOを立ち上げて、八月の平和コンサートの前に、みんなで準備を進めているところです。結婚を機に戻った故郷の広島で、小学生のときに被爆体験を話して下さったおばあさんと再会。改めて話を伺い、今しか聞けないと強く思いました。また、ある方の「私たちは、被爆者にも私にも、愛する人や家族がいる。原爆は、その命を一瞬にして奪うもの。地球に住む人間として、平和の大切さをつなげほしい」という言葉が胸に突き刺さって。それで体験談を朗読劇にまとめ、祈りを歌にのせて、伝えることにしたのです。

本橋——僕は東京の中野に生まれ育ち、今も任んではいます。二番目の娘がダウン症なのですが、区立の保育園に入り、そのままずっと中学卒業まで、ごく当たり前に普通学級に行っていたんです。保育園に通い始めた楽（娘）を連れて歩くと、あちこちで「あ、らくちゃんだ」。そのうち僕のこと、らくちゃんのお父さんだ」と覚えてくれた。地域がいいな、地元で何かできるかなと思うようになり、みんなが集える「ポレポレ坐」を開いて二〇年あまり。ス



本橋さんプロデュースの近作映画「祝の島」^{（原簿）}。山口県上関町祝島。瀬戸内海に浮かぶこの島で、人々は海の恵みに支えられ、岩山を開墾して、暮らしてきた。1982年、対岸4km先に上関原子力発電所の建設計画が持ち上がり、28年間反対を続けている。「海はわたしのいのちと言う島のジジ、パパを見てみると、原発はいらないと自然に思えます。いのちをつなぐ暮らしを守りたいだけなんです。それこそ市民力の原点じゃないかな」と本橋さん。現在公開中
監督・綿瀬あや <http://web.me.com.polepoletimes/hourinoshima>

養護学校に移ってしつたんです。彼女が高校二年で亡くなったとき、寿命は変えられなくても、どういう一七年にするかは、僕ら友だちが変えられたんじゃないかと、とても後悔して、社会福祉に関わるようになりました。大学の頃、町田市民テレビができるという小さな記事を見つけて、開局準備室から手伝った。市営テレビの第一号、卒業と同時に開局の予定が、受信収入がなく正規採用は無理と言われ、TBSに入社したのです。その後フリーになり、この一〇年は取材キャスターなどしながら、市民メディアのアドヴァイザーをしています。

湯浅——私の兄も、車椅子の生活だったんです。それで子どもの頃から日常的に、障害を持つ人やボランティアなどとのつき合いがあったのがとてもプラスになった。兄に感謝しています。

下村——湯浅さんが動き出すスイッチが入る準備は、そんな中でできていたのでしょう。いろんな人がいることは、暮らしやすい社会のキーワードですね。

本橋——楽が小学校二、三年になると学校に呼ばれ、「楽ちゃんのために特殊学級に」と言われました。でも、いつもニコニコして悩まない楽は、クラスにいただけの意味があつた。勉強で悩んでいる子たちはホッとして。相手を認めるという大切なことを、楽から学びました。

湯浅——兄も、高校は普通校に行つたんです。二学年上の方が車椅子で普通高校に入る道をつけてくれて。最初はエレベーターもなく、クラスの人が手伝って上り下りし、みんな車椅子の扱いなどが身についた。いろいろな人が混ざっていて当たり前なのに、いわゆる二極化、格差の広がる社会の背景には、中学生頃から同じ学力の子ばかりと過ごすことで、異質な人を理解できなくなっていく面があるかと思えます。今、地方公務員になるのはエリート。進学校から都市部の大学を出て地元に戻り、高倍率を突破して就職する。そういう人が福祉課に配属され、困難を抱えて生活保護を受けるような人たちに会っても、会話がなり立ちにくいのです。

下村——人を個で見る習慣や体験がない人が、見たことのないものに遭遇すると、例えば「野宿者」「被害者」「遺族」といったレッテルを貼ってしまうんですね。そして、そのイメージで問題を処理してしまう。誰か一人でも、そういう人と出会う個人的な体験を持つていけば、想像力のスイッチが速攻でオンになるのですが。

いろんな人がいることは、暮らしやすい社会のキーワードですね。

本橋——戦前、僕が子どもの頃、街の中におかしい人はたくさんいたのに、今は囲われてしまっているでしょ。

湯浅——路上は、そういう空間なんです。九八、九年、路上の人がどんどん増えていったのに、行政的な対応がなされず、必然的に路上コミュニケーションやテント小屋などができました。住民は「あの人たちがいると、子どもを安心して遊ばせられない」と言うけれど、野宿の人のほうがはるかに地域住民を怖がっています。路上生活者には、知的障害や精神疾患を持つている人も多いのですが、みんなからちよつとかわられる存在でも、雰囲気明るくしたり、周囲を和ませたり、うまくコミュニケーションしています。「障害を持つているから施設で」とならず、居場所がある。普通の社会よりも、いろいろな人を受けとめる力があります。

互いにしわを寄せあって

道田——ホームレスの人を見かけたら、湯浅さんは、すぐに声をかけるのですか？

湯浅——今みたいにくさくさ野宿の人がいると、きりがないので、活動の中で話しかけるようにしています。それぞれ抱えている問いはけっこう複雑で、一人じゃ対応しきれないことが多いのです。チームでネットワークを組みながらやっていかないと、本人にも不幸なことになったりします。よく、「毎日通る所に野宿の人がいるので、何とかしてほしい」とメールや電話がくるんです。本人の意向がわからないと対応のしようもないので、「まずは話しかけてみて」と言っています。

本橋——社会的なサポート体制が整って来ると、全部任せっきりになってしまう傾向がありますね。

湯浅——「任せておけば大丈夫」と思ってしまうのですかね。私たちも、猫の手も借りたい状態なのですが……。

下村——「何とかして」と言ってくる人から見ると、役所もNPOも変わらないんですよ。

湯浅——そうなんです。

下村——役所は「あなたがやって」とは言えないけれど、NPOは「じゃあ、いっしょにやろうよ」と言える。その巻き込みが市民力なんだと思う。今は、任せすぎと背負い込みすぎの両極端がありますよね。男の介護がそうでしょう。猛烈に働いていたときのノウハウを、そのまま介護に注いで、ギブアップする。男の介護の「ぼやき合っ会」



ビューはとても勇気がある。僕はこういうキャラだから、何でもないと思っていたのに、いざとなると、どう声をかけていいかわからなくて(笑)。

湯浅——向こうから、声をかけてくれないんだ。

下村——絶対にかけない(笑)。かみさんが「仲間に入れて

があつて、聞いていると、「ベランダで妻のおしめを干している、近所の人を通りかかったので、慌てて隠れた」とか。隠れる必要はないのに(笑)。女性は、ここに行ったら助けてくれると、地域を知っているけど、男は助け合いのネットワークを知らない人が多い。そしてあると分ると、全て任せようとして、分かち合いの発想がない。

本橋——「他人に迷惑をかけたくない」って言うでしょ。変ですよ。僕だって、いっどうなるかわからない。「すみません、ちよつと面倒みて」と、お互い迷惑をかけるのが自然だと思えます。

湯浅——障害者の人たちが「自立生活」を唱えた頃は、必要なときには人の手や力を借りながら、自分で生活をコントロールするのが自立でしたが、九〇年代頃からか、誰の手も借りないで生きていくこととなった。それなら、野宿の人が一番自立しています(笑)。

下村——誰の手も借りないのは孤立ですよ。象徴的だと思うのが、男の育児休暇が増えないこと。僕はテレビ界で初めて育児を取ったのが一八年も前なのに、未だに講演の依頼がある(笑)。

記者——育児休暇で視野が変わりました？

下村——そりゃあ、ものすごく変わりましたよ。地域社会ってほんとにあるんだな、とわかりました。男の公園デ

て」と頼んでくれた。その時できたグループは、今でもつき合いがあるんですよ。それでコミュニケーションができた感じですよ。また、毎日赤ん坊を見ていると、人間はいかに無力な存在としてスタートするか、身に染みてわかった。育児が終わって、例えば大物政治家と記者会見でらみ合っても、この人も昔は泣きながらお母さんにオムツを替えてもらってたんだらうなと思うと、全然恐くない(笑)。大げさに言えば、人間の原点が見えた。だから僕は「男も育児休暇を取れ、キャリアアップにつながる」と勧めています(笑)。菅さんが総理になった日の夜、仲子夫人に「今日が菅夫妻の最大の記念日ですか？」と聞いたら、「それは子どもが生まれた日よ。どんな政治家でも、命はつくれないでしょ」とさらつと言われた。

本橋——かっこいい！僕も出産に立ち会ったんですよ。豚や犬、猫の出産……みんな見てきたけれど、同じなんです。とても驚いた。命を生み出すというのはすごいこと、妻に対して一生、「おそれいりました」という感じですよ。(笑)

「じゃあ、いっしょにやろうよ」と言える。
その巻き込みが、市民力なんだと思う。

下村——子育ては、総理になるよりすごい(笑)。自分が育児休暇を取ったら、部署の人にしわ寄せがいくという男には、「しわは寄せあいましよう。しわを寄せあうのは悪いことじゃない」と言っています。波のように、あつちやこつちに寄せあつていけばいい。

道田——それも市民力ですね。家にいると、回覧板が回ってきたり、自治会費の徴収とか、いろんな人が訪ねてきます。すると「あら、妊娠されたの?」と自然に会話が生まれますが、男性には難しいのですか?

湯浅——間が持たないというか、世間話ができない(笑)。

道田——「今日〇〇さんが来て、このことを四時間くらい話したんだ」と夫に言うのと、「四時間も!」と、あきれられます(笑)。私たちの活動も、女性が多く、「ああしたら」「こうしようよ」とパワフルです。

湯浅——目的を定めてガツと邁進していく人は、女性にも男性にもいると思うのですが、愚痴にSOSを聞き取るとか、何気ない会話から何かを生み出すことでは、女性の方が強いといつも感じています。

下村——それは、社会に出てからの過ごし方の差じゃないかな。去年ぐらいから急に、定年になった団塊世代の男たちがどつと市民運動に入ってきて仕切ろうとするので、本当に迷惑と、女性たちから聞きます(笑)。和気あいあい

響きあひ揺さぶりぬるダイナミズム

記者——関心を持つ人と、持たない人の差が、どんどん開いていくのは、どうしたらいいでしょう?

湯浅——社会全体から見たらマイナー課題が圧倒的。それ

とやっていたのに、「まず組織の決定を通せ」と。

道田——組織第一になると、通りにくいことありますね。**本橋**——生活というか、暮らしがパワーになるのでしょうか。やはり男も子育てからもつとやった方がいい。

湯浅——私もその典型かもしれません(笑)。

下村——市民力がこれから伸びるか、頭打ちになるかの一つの鍵は、市民運動の中心となってきた第一世代にかかっていると思います。というのは被爆者も、胎内被爆や幼児被爆で体験として鮮明な記憶を持たない世代がなんとなく、と言い出したからよかったです。

湯浅——第一世代が委ねていけるかどうかですね。

記者——本橋さんは、後輩を育てるのがお上手ですね。

本橋——いや、育てるわけじゃない、勝手に育っているだけですよ(笑)。

湯浅——そのスタンスがいいのでしょうか。

本橋——大切にしているのは、人と人をつないでいくことぐらい、「遺産相続」と言っています。例えば下村さんと僕の間がつながり、下村さんが若い人たちとつながる。すると、僕もどこかでその人たちにつながる。そういうのが僕の財産、けつこう財産持ちです。

を知らせていくことが目的なので、そこがガシヤンと遮断されてしまうと、問題は改善されていかない。その壁をどう拓いていけるかが、活動ということだと思います。

伝える方法には、映像、読みもの、出会いなど、いろいろありますね。いろんな人が、いろんなことをやるのがいいと思います。よく先生が中学生や高校生を引率してきて、野宿の人の炊き出しなどを見学したり、体験したりします。子どもたちの感想は八、九割が「なんだ、普通のおじさんじゃん」(笑)。そのぐらいの年齢になると、もう偏見の塊。何かやらかしてここにいる特別な人、と思い込んでいるんですね。直接体験は一回にせいぜい三、四〇人が限界。何万、何十万人に一度に伝えようとすると、メディアを使わざるを得ない。濃く狭く、薄く広くと、無数のグラデーションを重ね、その量を増やしていくことが重要じゃないかな。それをやる人が増えていくといい。

下村——テレビスタジオでいくらしやべつても、本当に届いているか見えないけれど、舞台は見た人がぐつと濃い動きを始めたり、確かな伝播力がありますね。

大切にしているのは、人と人をつないでいくことぐらい、
「遺産相続」と言っています。

道田——音楽と物語とメッセージが重なり、大きな力が生まれます。劇団では障害を持つ方々を招待する公演日がありました。どつと拍手が来たり、体全体で感動を表わすエネルギーが伝わってきて、舞台も変わるんですよ。

下村——客席と舞台の響きあいですね。市民運動では、つまらなければ文句を言う、出て行く、あるいは別のものを創る。湯浅さんも、いろいろな言われるでしょ(笑)。互いに揺さぶりあいながら動くのが、市民力のダイナミズム。それが会社や政府など、組織との違いだと思う。

記者——内閣府の中に入られていかがですか？

湯浅——いやあ、あんまり違いすぎて……(笑)。市民運動は個人の集まりを「組織」と呼ぶような面がありますが、霞ヶ関は組織中の組織。でも仲間を増やし、周囲に影響を及ぼしていくプロセスは変わりません。問題が起きて周囲を説得し続けたりしていると、少しずつ仲間ができていく。今もその仲間たちと企画を練ったり、ずいぶんやりやすくなりました。市民運動は五人集まってできること、明日はしてしまうという機動性があるけれど、大きな組織では、五人では何もできないから、いろいろと騒いでようやく全体が動く。動ける人たちを作るのは同じです。

道田——一人の力には限界がありますね。いろんな出会いで仲間ができて——それが内閣府の中でさえ変わらないと味。仕事も、家のことも、遊びにも、僕はこの「自治区域」を拡大解釈して使っています。九五まで生きたお袋の面倒をみていたときも、まずは自分でやってみて、手に負えないところは区域を少し広げて、近所の人、友人、その延長で行政に助けを求めた。

何って、ホツとしました(笑)。

湯浅——官僚の中にも、もつと面白いことをしたいと思っている人は、たくさんいるんですよ。要はそういう人たちと、これはやれそうという雰囲気がつくれるかです。日本では「市民力」が弱いと思われていますが、それは量の問題か、質の問題か……。

下村——僕はテレビ局の特派員として、四年間ニューヨークで暮らしました。アメリカで市民運動が盛んなのはなぜかと考えていて、これだと思ったのが、街頭で道行く人に意見を求める「街録」をしたとき、誰もがきちんと答えるのです。「私はこう思う」とか、「それについては、私はまだ意見を持っていません」とか。驚いたのが、デモ隊を規制している警察官に、「君はどう思う?」と聞くと、「今は仕事だから規制しているけれど、自分はこの人たちに賛成だ」と、テレビカメラに向かって平気で言う。自分の意見を表明する力を持つまでに、日本はまだ時間かかるなあと。息子の通った幼稚園では、毎日みんなの前で三分スピーチをしていた。日直の子は「I am Special」というバッジをつける。そうか、スペシャルかと思いました。

本橋——僕の通っていた学校では、掃除の受け持ち場所を「自治区域」と呼んでいました。広辞苑にも載っていない言葉ですが、自分の使う場所は自分で管理するという意識。子どもが保育園で熱を出すと電話がかかってくるので、仕事をやめて駆けつけなければなりません。でも、自治区域の中で、手の空いている人がきつと迎えに行ってくれたり、学校のプールで「手伝ってほしい」と言われたら、写真をやっているうちの若い男の子が行き、すっかり人気者になったり(笑)。そうやって、ポレポレ坐ができ、昼飯もみんな交代でつくったり、映画やコンサートをしたり。地域に仲間ができ、外からも人が入ってきます。

湯浅——そういう空間があると、意見を言っても叩かれないう安心感がありますね。生活保護を受けている人やDV被害者は、話すだけでも大変なんです。話すことで二次被害を受けることもあって、「生活保護を受けてるくせに」とネット中傷されたり。大丈夫な空間があると話してくれるのですが、テレビカメラが入ると、しゃべれなくなる。安心できる空間というのは、受けとめる側にも話す側にも大切です。

下村——防災や安全の取材をしていて思うのが、「今度、こんなすごいNPOを地域で作る」という多くが、「それ

自分のエネルギーの九割をさく人が一割で、一割をさく人が九割いるような形態がいい。

昔、普通だったんじゃない？」という先祖帰り(笑)。僕が大学生の頃は、運動は「染まっていく」というアレルギー反応があり、やっている側も「断固反対」「粉碎」といった言葉で、世界に融和的でなかった。ずいぶん敷居が低くなってきた今がチャンスかなと思っています。

道田——下村さんがしておられる市民メディアの支援とは、どんなことなのですか？

下村——以前は、伝えるには、チラシを配るしかなかったでしょ。それにはお金がかかるし、受け取った人で終わってしまった。けれども今はネットやビデオでアピールできる。いい時代になったと思います。でも初めてのことなので、熱意はわかるけど、うまく伝えられていない(笑)。ほとんどの人が、見知らぬ大勢の人に向かって話す機会は結婚式のスピーチくらいで、気心知れた人とのコミュニケーションで一生を終えた時代は、多少舌足らずでも補って聞িয়েてくれたり、本題が出るのを待ってくれた。でも不特定多数への発信では、相手はつまらなければ聞くのをやめてしまうし、曲解することも。文法から変えないと、伝わらないといったアドバイスをしています。

湯浅——学校を開いているのですか？

下村——まだそこまで。「こういうものを作りたい」と相談されたら見に行き、定期的に通って助言したり。要す

ルのノンポリのやつらを、何人引つ張りこんだか(笑)。

君のやれることだけやってくれればいい、自分のエネルギーの九割をさく人間が一割で、一割をさく人が九割いるような形態がいんだよと言うと、みんな安心する。

湯浅——いい言い方だな。「プチ活動家」とか、「日曜活動家」でいいと言つても、ハードルが高いみたいで。

本橋——僕の所には、写真を撮りたいという若い学生がよくくるんですけど、「何を撮つたらいいですか？」と言う人には、「それなら、撮らない方がいい」と答えます。ガールフレンドのことが気になってしようがなければ、撮ればいい。それがいい写真につながる。面白いと思うものが見つかったときに、のめり込めばいいんです。

道田——演劇にのめり込んだとき、私もそうでした。自分で見つけることが、とても大事だと思えます。

記者——そうやって、みんなが少しずつ動き出すと、政治

るに、水道屋が水道管の詰まりを取って歩いているのと同じです(笑)。水が吹き出すと、また新しい回路ができてくるかなと思つて。

湯浅——Our Planet TVなど、私たちも活用したいと思つているんですが、いまいちやり方がわからなくて。

下村——でしょ？(笑)。みんな、そこで止まっちゃつている。そこを乗り越えて、点在している市民力がつながつたら、一十一は三ですよ。

エネルギーの一割をさく九割になれば

記者——ほんの少ししか動かなくても、あきめなだけで続けられるのは？

湯浅——面白いからやっているのです。貧困やホームレスの問題は、ほとんど手つかずだったから、無人の荒野のよう。少しずつ道ができていくのは、他ではなかなか得られない感覚じゃないかな。

本橋——子育ても介護も、面白ければそれなりに楽しい。そういうことが、みんなできたらいいですね。

下村——関心はあるけど、大変そうだからしないという人が、かなりいる気がします。僕は学生時代から、やりたがらない学生に声をかけて回つたんです(笑)。当時は新人だった菅(直人)さんの市民選挙事務所に、テニスサーク

も変わるでしょうか。

湯浅——それ以外に、変える方法はないでしょう。すぐには変わらないかもしれないけど、やっていくしかない。

下村——政治に一割のエネルギーをさく九割の人が現れればね。出たり入つたり湯浅さんの関わり方は、理想的だと思えます。(笑)。

湯浅——いやあ……引き際もなかなか難しくて。

道田——私は八月半ばが出産予定日なのですが、細々でも続けていたいと思つています。八月七日のコンサートも、やめようかという思いが頭をよぎったのですが、高齢の被爆者の方に、「こけないように気をつけて歌うわ」と言われ、仲間のみなさんにも「私たちががんばるから、任せろ！」と言つていただき、感動しました。今日もいい胎教、お腹の中で「市民力はすごいなあ」と聞いていると思えます。(笑)。